平成 27 年度

第１回
地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会

議事録

平成 27 年５月 13 日（水）

第１回　地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会　議事録

１　開 催 日 時　　平成 27 年５月 13 日（水）　午前 10 時から午後０時 14 分まで

２　開催の場所　　県庁別館９階特別第一会議室

３　出 席 者　　委 員 長　　矢野　弘典
副委員長　　池上　重弘
委　　員　　片野　恵介
委　　員　　加藤　暁子
委　　員　　加藤　百合子
委　　員　　清宮　克幸
委　　員　　鈴木　竜真
委　　員　　仲道　郁代
委　　員　　藤田　尚徳
委　　員　　堀田　和美
委　　員　　マリ　クリスティーヌ
委　　員　　六車　由実
委　　員　　藪田　晃彰
委　　員　　渡邉　妙子

知　　事　　川勝　平太

４　議　　事
（１）副委員長選出
（２）今後の進め方について
（３）意見交換
（４）その他

【開　　会】
事　　務　　局：　定刻になりましたので、ただいまから第１回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。
　委員の皆様におかれましては、当委員会の委員への御就任につきまして、お引き受けいただきましてありがとうございます。また、本日は、お忙しい中、当委員会に御出席いただきまして、重ねてお礼を申し上げます。
　私は、本日司会を務めさせていただきます文化・観光部総合教育局長の鈴木と申します。よろしくお願いいたします。
　まず、お手元の皆様にお配りいたしました実践委員会の次第の書いてある資料につきまして、御覧ください。
　２枚めくっていただきますと実践委員会の委員の一覧を掲載させてい

ただいております。それからもう１枚めくっていただきますと、資料１としまして「地域自立のための『人づくり・学校づくり』実践委員会設置要綱」を定めておりまして、この設置要綱に基づきまして委員会を開催させていただいております。

なお、当委員会の委員長につきましては、設置要綱の規定に基づきまして知事の指名により、矢野弘典委員に御就任をいただきます。よろしくお願いいたします。

また、委員の皆様のお席には委嘱状を配布させていただきましたので、併せてよろしくお願いいたします。

なお、本日は、名簿の上から３番目の奥島委員、それから中段の後藤委員、それから下から４番目の宮城委員、御三名が所用により欠席となっておりますので、よろしくお願いいたします。

また、仲道委員、マリ・クリスティーヌ委員につきましては、少し遅れて到着するということで御報告をいただいております。

それでは、開会に当たりまして、知事から御挨拶申し上げます。

川　勝　知　事：　皆様、どうもおはようございます。

この「地域自立のための『人づくり・学校づくり』実践委員会」の委員に御就任を賜りまして、まずはお礼の挨拶をいたします。

また、この前身でございます「地域とともにある学校づくり検討委員会」におきまして、矢野様にはその総括を務めていただきましてありがとうございました。また、御提言を賜りましてありがとうございました。

この実践委員会におきまして、検討委員会で御提言を賜りましたその委員の方々の大半、ほぼすべての方々に御就任賜っているはずでございますが、引き続き何卒よろしくお願いを申し上げます。

御案内のようにこの４月から日本の教育制度の大きな改革がもたらされまして、教育委員会に地域の代表である首長が加わって、それが総合教育会議というふうに名付けられまして、第１回の総合教育会議が先般開かれたところでございます。

その場合に、この政治の中立性、教育に対する政治の中立性、また継続性、安定性というものを保障しなくてはなりません。私は、総合教育会議に臨むに当たりまして、県内外の優れた立派な実績をあげられている方々の御見識をしっかり踏まえた上で総合教育会議に臨むということで、その旨を第１回の総合教育会議において申し上げた次第でございます。

一方、この検討委員会におきまして、前の検討委員会のときにいただきました御提言、例えば、文武芸三道の鼎立を図る、あるいは実学を重視するとか、あるいはコミュニティ・スクールをこれから作り上げていくといったようなことは、言うまでもなくこれを踏まえて総合教育会議で御説明申し上げますし、資料も提供した次第でございます。

私はこれからの時代、大きくこの教育制度が改革されたということにも増して、遇々今年は徳川家康公没後400年というふうにも言いますけれども、これは400年というそういう時代で御覧になりますれば、400年の前、家康がこの幕府を開く前は、文字通り血で血を洗う下克上の戦乱の世の中でございました。しかしながら、家康公が大阪冬の陣、夏の陣をもちまして、天下平定せられたあと、実質的に内乱がなくなりまして、パックス徳川と言われるような時代が現出いたしました。

そして、刀を身に付けた人たちは、筆を握るようになりまして、言わば官僚の時代になったわけでございます。武士は官僚になったと。そのベースになっているのが、実は、新しい学問、儒学というものであります。限定すれば朱子学というものであります。そして、やがて270年が経ちまして、欧米の学問をベースにした形での国づくりをしなければならんということになりまして、いわば漢文をもって第二外国語としていた日本人が、英語を中心にした欧文を学んで、欧文の洋学をもって国づくりをするということに変えたのです。

私は、それを言い出したのは福沢諭吉だと、あるいは静岡県の偉人の一人でございますれば、素六だというふうに思いますけれども、新しい国づくりには新しい学問がいると。実際それを象徴しているのが福沢諭吉で、この人は一万円札に印刷されておりますけれども、それは日本の顔、すなわち今日近代をつくり上げたのは、学問のすすめを書いた顔である、つまり学問立国であるという、そういうことであります。

そしてそれは、今日まで武士官僚諸氏、又は国の官僚諸氏によってつくり上げて来た、官僚支配の400年であったということが言えます。そしてそのベースに学問がある、あるいは教育があるということでございます。

さらに、その江戸時代の前400年を振り返られますと、今度は言うまでもなく武士の時代です。もののふの時代であります。

その前400年を振り返られますと、これは平安朝が生まれたのが794年でございますから、それが武士によって倒されて1192年に鎌倉幕府ができると、すなわち貴族が中心になられた時代、これは中国国家のこれは文字通り仏教というものを学問とした国づくりでございました。そして1200年からはこれは自力本願、いわば禅というものをベースにおいた、そういう自分を鍛えながら文武両道でやっていける、最終的には新しい朱子学やそして近代になりましてからは洋学であったと。そういう意味で400年という節目に当たっているということでございます。要は、今は地方創生でありまして、地方創生の一番の基礎は、私は教育であると、人づくりであるというふうに思っているわけであります。

したがって、どういう人間が必要であるか、北海道において、沖縄においてではなくて、この地において、どういう学問、どういう教育を

することが真に地域の創生をもたらすのかといったときに、この洋学が導入せられて英数国理社というふうなものが中心になったことを踏まえながら、一方でスポーツや芸術やあるいは農業や水産業やあるいは福祉や様々な分野において人が能力を発揮することが重要なそういう時代が迫っております。

同時にこの静岡県下だけでも16個を超す、富士山が世界文化遺産に登録が勧告されたのが丁度今から２年前のことでありまして、その勧告がなされるやあっという間に、農業遺産として茶草場が登録され、南アルプスがエコパークとして登録され、その数が今16に、そしてまた可能性があるものとして３つございまして、世界クラスの地域資源、これが19にもなっております。

その資料は、ここでまたお配りしたいと存じますけれども、すなわち世界の中における、世界クラスとして認定せられているものがこの地域に20近くもあるということでございまして、私どもは世界の中でいかに活躍できるような人材を養成するか、しかもそれは地についたそういう人材でなければならないということで、私は総合教育会議におきまして申し上げたのは、まずは世界の中で生きていくものであるということで、国際化ということが大切だということで、それは10代のうちに一度は外国を経験していると、井の中の蛙にならないように、そういう制度を導入することが必要であるということで高校生全員にパスポートを差し上げられるようなそういう校風を作って欲しい、そのためには先生がそういうような国際的な存在でなくてはならないということを申し上げました。

と同時にですね、二つ目としましては、やはり英数国理社の偏差値教育ではなくて、スポーツや芸術やあるいは様々なことを通して人材が養成されるので、広くこれは世の中の人たちに注目されるという意味で実学という言葉を使っておりますけれども、座学ではなくて実学としてですねこれを奨励をしたい。いわゆる英数国理社以外に図工であるとか美術であるとか音楽であるとかスポーツであるとかその他様々なことでございますけれども、こうしたものも併せて奨励していきたいというふうに申し上げました。

それからまた、社会総がかりということでございますので、それをコミュニティ・スクールとして作り上げていくことが大切であるというふうに申し上げた次第でございます。

そのためにはやはり、第４に人材が必要でございますので、これはこの検討委員会で御提言賜りました人材バンクというのを何とか形にしていきたいというふうに思っております。

そのやり方などにつきまして、既にこちらで御意見も出ているようでございますけれども、こうしたやり方を踏まえまして、それを総合教育会議の方に持ち込みまして、皆様に御検討いただいて実践に移していくというふうに思っております。

文字通り、地域自立の基礎としての人材づくり、その人材づくりのいわば静岡県下における何と言うのでしょうか、文部科学省の審議会と言うのでしょうか、教育審議会が皆様方だというふうに、ふじのくに静岡県の教育審議会の委員の先生というふうに御自任賜ればと思います。

私は決して国の教育審議会よりも劣っているなどとは夢にも思っておりません。勝るとも劣らぬ人たちにこちらに来ていただいているというふうに思っておりまして、地域自立のその見識を皆様方に御議論賜りまして、それをこれから新しい日本づくりに生かしてまいりたいというそういう志を持っております。

何卒よろしくお願い申し上げます。

事　務　局：　ありがとうございました。

続きまして、矢野弘典委員長から御挨拶をお願いいたします。

矢野委員長：　御紹介いただきました矢野でございます。今回この大事な会議の委員長を仰せつかり、一年間皆様と一緒に議論を深めて、具体的な提案に結び付けるように尽力したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年度の地域とともにある学校づくり検討委員会とこの実践委員会は組織としては別ですけれども、考え方はつながっていますので、検討委員会で提言したものの具体化が、実践委員会におけるまず一つの課題であります。

私は、教育とは、普遍性をもった課題であり、静岡らしさとは狭い静岡らしさではなくて、普遍性をもっていなければならないと思います。

最も総論的に言って、静岡らしさは何かというと、富国有徳の国づくりという視点、これは、日本はおろか世界にも通用する素晴らしい価値観を秘めていると思います。また、文武両道とは昔から言われておりますが、昨年度の検討委員会で提言のあった文武芸の三道鼎立というのも、大きな静岡らしさを示す言葉ではないでしょうか。

そして、大切なことは、このような大きな目標に向かって、これをどうやって具体化するかです。コミュニティ・スクール、人材バンク、あるいは学校中心の活動だけでなく、地域を主体とする活動への提言もあり、これらの問題に取り組むことも各論としての静岡らしさであります。

是非各論で良い提言をするため、どうぞ皆様の御経験や御見識を生かして、存分に御発言をいただき、それを委員会としての総意にまとめていきたいと考えています。

私は民間企業で育ち、学校を出て52年になります。人から教わってばかりで、あまり人を教えた経験はないのですが、教育の大事さに気付く機会が多々ありました。

少し具体的な経験に基づいて申し上げます。一つは、ささやかながら経営者としての体験です。中日本高速道路株式会社の会長を務めまして、新東名を造ったり、東名の維持管理をしたりしてきたのですけれども、道路を造り、運営するのは、すべて人なのです。

私は、人づくりが経営の一番大事な仕事だと信じて疑いません。人を育てれば必ず会社はうまくいきます。どんなに今財政が豊かで技術があったとしても、そこに優れた人がいなければ決してその会社は栄えないし続きません。

ですから、どうしても立派な人をつくっていかなければいけない。専門性があって、しかも人格的に優れている人です。これは東洋では昔から才徳兼備というのですけれども、私は静岡県の富国有徳という言葉に接するたびに、才徳兼備の人づくり、これを何とかしたいと思います。

会社というものは、人がやる気を出すと本当に変わってきます。静岡県に一番関係する事業は新東名の建設ですが、これについては、会社としての経営理念、道路建設の基本方針をしっかり決めた上で、いつまでに造るか、目標をはっきりさせて動き出す。そして、経営者はしばしば現場に行って、みんなの話を聞いて、会社の方針を変えなければならないと思えば、臨機応変に変えていくのです。そうすると不思議に力が盛り上がって、良い結果が出るのです。

本当に口はばったい言い方なのですが、経営者は、良き教育者でなければならないと痛感しました。部下を教えるということです。経営理念や会社にとって一番大事な価値観は何か、どういう方針でいくか、世の中が変化によってどういうふうに変わっていくか、それにどう対応するかを含めて、しっかりと組織の中の一人ひとりに教えていくことが経営者の大事な務めであるということが、会社のトップになって良くわかりました。

そういう意味で人づくりを考え続け、新入社員から幹部に至るまで、一生懸命鍛えてきたのですが、どうもそれだけでは足りないと思うようになりました。

大学生、高校生あるいは小中学生の頃から、教育しないといけない。本当に国、地域、県を挙げての大事業ですが、それができると、世の中が本当の意味で活性化していくのではないかと思います。

二つ目の経験として、私は、数年前まで、ある大学の客員教授を何年間か仰せつかって、二十歳前後の学生に話をしていました。学校から与えられたテーマは経営学なのですが、私は90分の授業のうち最後の10分を専門的な講義とは別に「心に残る言葉」という時間を設けて話をしました。

私が感銘を受けた古今東西のいろいろな本の中からの一節を取り上げて、どういう人が言ったのか、私自身の人生にとってどういう意味があったのかという話を毎回10分したのですけれども、学生たちに感想

文を書かせたら、経営学の専門的な話について、とても良かったと書いた学生はほんのわずかしかいなくて、先生の話で一番良かったのはあの10分だというのです。

そのときに私は、今時の若い人たちも、心に染み入るような古人の名言を心の底では求めているのだということに気付きました。若者が目を輝かせて、寝ている子も顔を上げ、おしゃべりしている子も黙ってしまうのです。やはりこういう言葉は、若いときに教えなくてはいけないのだなと思いました。

そうこうしているうちに、中日本高速道路株式会社でのフルタイムの仕事を５年前に辞めまして、その時を機に小学生を対象にした「お爺ちゃんの論語塾」を我が家で始めました。三つ目の経験です。

論語をテキストにした素読、暗唱を毎週１回やっています。昔の寺子屋の現代版ですが、これをやっていて気付いたことがたくさんあります。

小学校低学年でも難しい漢字を全部覚えてしまいます。大きい声を張り上げて朗読をし、暗唱しているうちに、倫理とか道徳とかを殊更に教えなくても、そうした価値観が自然に身に付いてしまうのです。江戸時代の寺子屋の教育というのは、本当にすごい教育だったと思います。明治維新は寺子屋の教育の成果でもある、大きな原因は津々浦々に普及した寺子屋教育であると御説明なさる方がいますが、私はまったく同感です。

上の子たちは、中学生や高校生になりましたが、日本語をちゃんと勉強すれば、外国語も上手になる、日本語で内容豊かに自分の心を耕せば、それを表現する英語という道具を使えるようになるという話をしております。みんな日本語、国語が大好きになり、本を良く読むようになり、英語も好きになっています。国際化を進める上で、一番大事なツールは外国語、特に英語力です。ツールは、磨かなければなりません。国語の力が付けば、英語の力も必ず上がるものと思います。私自身、国際ビジネスに長く携わりましたので、体験を通じてそのように確信しています。

実業の世界で暮らしていた者でありますが、今申し上げた幾つかの経験を通じて、子供の頃からの教育というものを真剣に考え、そしてお役に立つようになりたいと心から念願しています。そういう意味で今回このようなお役目を頂戴したことはたいへん光栄であり、何とか微力を尽くしたいと思います。どうぞ皆様よろしく御協力をお願いいたします。

事　務　局：　ありがとうございました。それでは、議事に入りたいと思います。なお、委員の皆様におかれましては、発言する際にはお手元のマイクボタン、真ん中のところにオンオフとありますけれども、それを押して

いただいて、発言が終わりましたらまた押していただければオフになりますので、よろしくお願いいたします。これからの議事進行につきましては、矢野委員長にお願いいたします。

矢 野 委 員 長：　それでは、今日は議事次第に従いまして、進めてまいりたいと思います。まず、最初に地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会設置要綱第５条第３項に基づきまして、副委員長を指名したいと思います。池上委員に副委員長をお願いしたいと思いますが、池上委員よろしいでしょうか。

池　上　委　員：　かしこまりました。謹んでお受けいたします。

矢 野 委 員 長：　どうぞよろしくお願いいたします。
　それでは、副委員長席にどうぞ。
　（池上副委員長が副委員長席に移動）

矢 野 委 員 長：　では、続きまして配布資料について、事務局から御説明をお願いします。

事　　務　　局：　それでは、事務局から御説明いたします。
　お手元の資料の２ページをお開きください。資料２の「地域自立のための『人づくり・学校づくり』実践委員会の設置について」でございます。「１　目的」にありますとおり、知事は、総合教育会議における協議を社会全体の意見を反映したものとするため、様々な分野の有識者の皆様を委員とする当委員会、「地域自立のための『人づくり・学校づくり』実践委員会」を設置いたしまして、総合教育会議に先立って、委員の皆様から御意見をいただきます。
　なお、参考までに申し上げますと、総合教育会議とは、知事と教育委員会が本県における教育の方針などを協議するため、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき本年４月１日から設置されている会議でございます。
　３ページを御覧ください。当実践委員会における「平成27年度の検討事項及び年間スケジュール」の案でございます。「１　検討事項」にありますとおり、本年度は、「(1)静岡県総合教育会議における協議事項」と「(2)『地域とともにある学校づくりに向けての提言』の具現化」について、御検討いただく予定です。
　まず、(1)の総合教育会議における協議事項でございますが、４月24日に開催された第１回総合教育会議におきまして、この資料に記載いたしました「教育の大綱」、「教職員及び高校生の国際化」、「部活動等で活用できる人材バンクの構築」、「スポーツや芸術などの実学の重視」、「大学と大学院の充実」以上の項目を、本年度の総合教育会議の協議

事項とすることが決定しております。

また、昨年度、本県では、「地域とともにある学校づくり」検討委員会を設置し、この検討委員会からは、昨年度末に(2)に記載の「地域とともにある学校づくりに向けての提言」をいただいております。

御提言の内容は、資料４として後ほど説明いたしますが、当実践委員会におきましては、この提言の具体化、実践に向けた取組についても御検討いただきたいと考えております。

次に、２の「年間スケジュール」について御説明いたします。本年度、委員会は、年５回程度の開催を予定しております。各回の議事内容は、総合教育会議の協議事項に沿って資料に記載しました事項を御検討いただこうと予定しておりますが、進捗状況などにより、柔軟に変更して対応させていただきたいと考えております。

続きまして、４ページの資料３の「第１回静岡県総合教育会議　議事要旨」でございます。

先ほど御説明しましたとおり、第１回総合教育会議が、４月24日に開催されました。第１回総合教育会議では、４の(1)に記載の「教育の大綱」の策定について、そして、(2)に記載の重点施策「教職員及び高校生の国際化」以下４項目について、協議していくことが決まりました。

第１回総合教育会議における出席者、すなわち本県の教育委員の発言要旨につきましては、５に記載のとおりでございます。

続きまして、７ページの資料４、「地域とともにある学校づくりに向けての提言」でございます。この提言が、昨年度末に「地域とともにある学校づくり検討委員会」からいただいたものでございます。この提言では、「１　取組の方向性」のところでございますが、一つ目、学問、スポーツ、文化芸術の素養をバランスよく身につけるとともに、豊かな徳を兼ね備えた「有徳の人」の育成を目指す。二つ目、「地域とともにある学校づくり」の推進により、地域全体の教育力の向上につなげる。

以上を目標とした上で、「２　具体的取組」として、(1)「コミュニティ・スクール導入促進」、(2)「文武芸の三道鼎立」、めくっていただきまして、(3)「静岡らしさの具体化」、(4)「関係者の意識啓発」、(5)「優れた教育実践の情報発信」以上、５つの項目に取り組むべきである、との御提言をいただきました。

最後に、参考資料でございます。

本日は、別添資料として「教職員及び高校生の国際化について」を配布させていただきました。この資料では、「県内教職員や高校生の国際化等に関する現状」や「本県の施策」について取りまとめてございます。

また、リーフレットの「静岡県の教育」と冊子の「静岡県教育振興基本計画『有徳の人』づくりアクションプラン第２期計画」を配布してございます。

「静岡県の教育」は、本県の教育の概要をとりまとめたものでございます。

また、「有徳の人」づくりアクションプランは、平成26年３月に策定したものでございまして、本県では現在、この計画に基づき、総合的に教育関連施策を進めているところでございます。以上で事務局からの説明を終わります。

矢野委員長：　どうもありがとうございました。今日は第１回目の顔合わせでございますので、後ほどお一人５分位のお時間で、それぞれのお考え、自己紹介を含めて御発言をいただこうと思っておりますが、その前に資料の内容も含めて、ただいまの事務局の説明について何か御質問があれば、御発言をお願いします。

特に御発言ないようですから、内容については折々また議論が進む中でお確かめになりたいことがあったら御質問いただきたいと思います。

それでは、先ほど申し上げましたとおり、お一人ずつ御発言をいただきたいと思います。自己紹介と教育のあり方についてのお考え、あるいは今日の第１回目のテーマとして総合教育会議の協議事項の中から「教職員及び高校生の国際化」ということを取り上げておりますので、その点についてもお考えがあればお願いします。５分しかなくて誠に申し訳ございませんが、よろしくお願いします。

それでは、池上先生お願いします。

池上副委員長：　はい。副委員長を任ぜられました池上でございます。私は昨年度の会議には参加しておりませんので、まったくニューカマーという状況でここに座っております。そういう意味で自己紹介をちょっとさせていただきたいと思います。私は生まれは北海道の札幌で、静岡は縁もゆかりもなく、親戚縁者、友人、知人、誰もいない中でやってまいりました。けれども20年近く浜松で暮らしていく中で、非常にこの土地が素晴らしい土地であるということを痛感している次第でございます。

私は、浜松にある静岡文化芸術大学で今教員をしておりますけれども、もともとの専門は文化人類学でインドネシアのスマトラ島をフィールドとする研究をしてまいりました。

そういう意味では今日のトピックとの関連で言うと、国際化の経験ということでインドネシアに１年間の留学、そして都合２年間のフィールド調査、合計３年間ほどインドネシアで生活をした経験がございます。

また、もうひとつ私の研究の軸足が多文化共生と呼ばれる分野でございます。正直申し上げると今インドネシアの研究そのものは、私のアウトプットの１％あるかないかで、ほぼ99％、こういった公的な場での発言も含めて、多文化共生に関することが多くなっています。

御存知のように浜松はブラジルの方の人口が日本で一番多い町であり

ます。減少しましたけれども、それでも、むしろそれだからこそというべきでしょうか、永住ビザを持って定住志向の外国人が増えている状況をずっと研究してまいりました。で、今ここにいるわけであります。

皆さんは外国人の子供たちというのは課題を持った人たち、支援をしなければいけない人たちという認識をお持ちだと思います。そういう側面も大きいことは、今日でも変わりありません。数で言うとやはり支援が必要で日本語がなかなか身に付かなくて、学費を出すのに困っている子たちも多々います。

一方で、私どもの大学は一学年定員が300名という小さな大学でございますけれども、そこに今10名を超えるブラジル人の学生がいます。留学生ではございません。この国で育って日本人の学生と同じ入試を突破してきた、そういったいわゆる在留外国人の子供たちが静岡県内では大学に進学をしている。この４月にも複数そういった子供たちが入ってまいりました。まだまだ数は少ないですけれども、そういう子たちは、ポルトガル語を母語にして、日本語を子供時代にゼロから覚えて、更に英語も良くできる子が多いです。ある学生が言っていました。私はハリーポッターのあの全巻をポルトガル語と日本語と英語で読んだと。日本語と英語で読んだという子供はいるかもしれません、しかし、いったい静岡県内に、もう一つの言語でハリーポッター全巻を読んだ子供が何人いるでしょうね。そういった言わば本当にグローバルな人材が、この静岡県では育ち始めている。課題としての多文化共生、外国人の子どもの教育の問題という立て方が多いのですけれども、是非私は足元にいるグローバル人材、内なる国際化を自ら体現した子供たちにも光を当てながら、そういう子供たちと共に学ぶ静岡の子供たちが世界に羽ばたいていけるような、そういう視点も是非この会議で取り入れていきたいなと思っているところであります。

また、もう一つ今日申し上げたいなと思うことがあります。昨年度の会議の中で、あるいは４月24日の会議の中で、先生方がまず海外に出て行く、あるいは修学旅行で海外に行くことが言われております。このこと自体には総論で賛成です。その一方で表面的な理解をして帰ってくることの危険性にも注意を払うべきであると思っております。

例えば、オーストラリアに行って表面的に英語を通じていわゆる白人とコミュニケーションをして帰ってくる子たちが多いです。そのことで英語が通じなかった経験から英語を真剣に学びたいという子は多いのですが、一方でオーストラリアはあれだけの移民国家で、アジアの中にある英語圏の国としていろんな苦労もあった。そういった移民国家としての側面を体験するために、スタディツアーをもっと有効に活用してはどうかと思います。バスに乗って表面的に観光施設を巡って海外に行ってきましたというのではなくて、向こうのＮＰＯなり何なりと連携しながら、例えば先方の学校教育の現場を見るとか、いろい

ろな社会的な活動の現場を体験するとか、そういうスタディツアー的な要素を含んだ先生方の研修であるとか、あるいは修学旅行が組み込まれていくと、本当の意味での海外に目を開く機会になるのではないかなと思っています。

とりわけ日本というのはアジアの中にありますので、アジアの中にある国で、国際的な視点を持つために見に行くのも、そういったスタディツアーを通じて、開かれていくのかなと思っております。以上です。

矢野委員長：　それでは、こちらから順番にお願いしたいと思います。次に片野さんお願いします。

片野委員：　座ったままでよろしいでしょうか。

矢野委員長：　はい。

片野委員：　静岡県は函南町で酪農をやっております県青年農業士会会長の片野恵介と言います。ほんの数時間前まで牛に餌やりをやってこの場にいますので、本当にすごく緊張していまして、皆様のように流暢にしゃべれるわけでもなく、本当に緊張し通しなのですけれども、よろしくお願いします。

この題目をいただいたときに、自分自身、学生時代のことをちょっと思い出したのですけれども、自分は中学高校と柔道をやって、そして大学では農業大学に進学したのですね。農業大学ではサークル活動を自分で立ち上げて、農家の皆さんのところに行って実際に農業をお手伝いしようと、そういうサークルを大学１年のときに立ち上げました。

そうしている中で、中学、高校時代、学生時代は本当に与えられることにすごく慣れ過ぎていたと思ったんですよ。

教材にしても食事にしても、両親がまた学校の給食のおばさんが与えてくれる、作ってくれる。そういったものが当たり前のようだったというところで、感謝をすることに少し疎かった自分がいたと。

小学校のときは給食だったのですけれども、手を合わせることを先生から教わってそれをしていたんですが、中学生になってから母が作ってくれる弁当に変わったんですけれども、そのときに手を合わせることをしなくなってしまったんですね。

食に対して感謝をする気持ち、そういうふうな何か一日に感謝するタイミングって僕らにはあると思うんですよ。そういうことに気付かずに大人になってしまった自分がいたのかなと思う中で、この静岡県の子供たちにはまず感謝をする気持ちを持ってもらいたいなと、自分の失敗の経験から。

今聞いたら、中学までは学校給食に切り替わっている。そう聞いて、それでじゃあ給食のときにいただきます、ごちそうさまって言ってる

のって聞いたのですが、言っていると。じゃあ高校ではと聞いたら、バラバラで食べているので、そこでは言ってないと。

国際社会に出る中で、人と人とのつながりって、どういうものがつなげているかっていうと言語もそうなんですけれども、感謝と感謝の結び付きだと思うんですよ。そういうものがなしに人と人とは調和を取って何かをする、協力できるってことはできないと思うんですね。感謝に対して、人の心に対して敏感である、それから感じ取れるような人間性を形成していく上で、中学でできたことが高校でできなくなっているということは、私たち大人にとっても本当に情けないというか、なぜ気付いてやれなかったのかというふうにちょっと思っています。

ですので、教育現場の先生方、また親御さんにおかれましては、食事を取る際、一日３回は、何か感謝をして、感謝の気持ちを常に持って生活をして欲しいと思っています。

それがひいては、この題目である国際化にもつながってくるのだと思っております。

何かちょっと説教くさくなってしまったようなんですけれども、これは全部自分自身に言っていることなので。それで、では家庭で御両親が、先生方が本当に手を合わせて食事を取っていらっしゃるのか、そういうことを本当に何か知りたいなと自分は思っております。

そういう姿を子供が見れば、きっと子供も感謝する気持ちを持ってもらえると思うんですよ。それこそ、ファーストフード店とかコンビニとかに行けば、お金を出せばすぐに食事が手に入ってしまう世の中で不便さがない、そういうところで私たちは大事な感謝をする気持ち、命をいただくという気持ちをものに対してすごく疎くなってしまった。そういうところをうまく教育の中の現場でもう一度再生していく。それをまず始めて欲しいなと僕は思っています。ひいては、静岡県民の大人の皆さんが、僕を含めてですけれども、ものを購買するときでもありがとうと言ってお金を渡せるようなそこまでになれば、国際社会の場に出ても十分にやっていけると思います。

余談ですけれども秘密のケンミンＳＨＯＷとかテレビでありますが、その中で静岡県民はものを買うときにありがとうと言ってお金をわたすと、そうなるような県民性になれば、それが僕の中の理想なのですけれども。私の話は以上です。ありがとうございます。

矢 野 委 員 長：　ありがとうございました。心に染みるお話でした。どうもありがとうございます。それでは、次に加藤暁子委員お願いいたします。

加藤（暁）委員：　日本の次世代リーダー養成塾の加藤暁子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私も今回初めての参加でございまして、全国からですね高校生を福岡に集めまして170人、それとあと去年からはですね、中国、韓国、モンゴル、タイ、マレーシア、インドネシアの高校生た

ちを20人無償で招待いたしまして、みんな一緒になって、およそ200人ですね、二週間のサマースクールをやっているのですが、これは私自身はもともと新聞記者を20年間しておりまして、教育のプロではないそういう人たちによってですね、産官学でですね、いわゆる世界に雄飛する人たちをつくろうじゃないかというようなことで、12年前、今年で12回になるんですけれども、都合2,000人の高校生たちを世界に送り出してまいりました。第１回目からですね川勝知事が学者の頃からいらしていただいてですね、やっぱり日本の高校教育の中でですね、私いつも疑問に思うのですが、日本史を勉強した人は世界史を勉強してないし、世界史を取った子は日本史を勉強しなくていいというような、そういう状況がずっと長年続いていてですね、川勝知事の話はですね単にその日本で起きている例えば江戸時代、それが世界の中でどうやって世界の中の国と接していく、世界史の中で日本がどこに向かって、何を考えて、どうしていったのかという、そういうような最新の歴史教育をしていくのが大事なのではないかという気がしたのですけれども。

今回ここにパンフレットを持ってまいりました。後でまた見ていただきたいのですが、マレーシアのマハティール元首相に12年回連続いらしていただいたりだとかですね、タイのタクシン元首相も来られたりとか、そういうようなアジアの方々だとか、あと宗教学者の山折哲雄先生だとか、国連の明石元事務次長とかですね、それからデザイナーの水戸岡鋭治さんとか、柔道の山下泰裕さんですね、各界を代表する方々に講義をしていただいているのですね。この方々というはその専門家、つまりプロとしても超一流の方ですが、私生活というかそういうところでも素敵な人間というか、子供たちにとっての目標になるような人たちなのですね。

こういう方々に25人いらしていただいているのですが、その中の一人でもですね僕はこんなふうになりたい、私はこの人を超えてみたいと思うような一つの出会いというのが大事だなと思ってやってきたのです。

あと日本の教育というのは、どちらかって言ったら一方通行なので、ディスカッションをするというそういうような教育をしたり、去年からはアジアの子たちを入れていますので、そういう意味でアジアハイスクールサミットというのをやりまして、日中韓ある意味、国のレベルではちょっとうまくいっていない、それを高校生のレベルでどうやったら皆が21世紀仲良くしていけるかという提言をですね、先ほど具体策ということがありましたが、どうやったら具体的に仲良くなれるかという方策を考えたり、夜通しでそういう議論をしていくのですけれども、私、二週間毎年やって思うのは、とにかく吸い取り紙みたいなんですよ。ですから、こちら側がですね、ある意味何でもできるよという、それから夢を与えてあげたらどんどん高校生たちは変わって

いくんですね。この変わっていくというところが、やっぱり人としてすごいエネルギーがあるんですね。ここはですね、今の子たちは内向きだとかってよく世の中で言われていますけれども、それは大人が作っているんですよ。ですから、いつも高校生たちはやっていいですかとかって私に聞きに来るので、やりたいのと、聞き返すようにしているんですね。でやりたいって言うんだったらじゃあ私を説得してやりたいように持ってきなさいよっていうと、みんな目を輝かせてやるようになるんですよね。そのやる気を起こさせる仕組みづくりをしてあげるのが、大人の役割なのかなというふうに思うのですね。

それとやはり今の子たちはある意味本当に甘やかされているし、それから日本はどんなに貧乏と言ってもやっぱり豊かです。それは。そういう中でですね、打たれ強くないです。得てして何か衝撃を与えられるとすぐシュンとなっちゃったりするのですけれども、打たれ強いというかどこでも生き抜く力、国際化というのは世界中どこにいっても生き抜いていける、それから自分の身を守ることができる、生き長らえていく力を付けることなんじゃないかなというのをこの12年間教育ということに携わってみてそう思いました。

静岡県の子たちも毎年10人ほど来ていただいているのですけれども、みんな本当に雄飛しています。こういう講師の方々に会うことによってですね、今までは自分が持っていた夢をですね、もっと大きく広げて、例えば一日今まで２時間位しか勉強しない子が、瞬発力で13時間くらい勉強するようになって、それで外交官にチャレンジしてなった子もいます。それから海外でＮＰＯをやったりだとか、ネパールに行った子もいれば、それからロンドン大学だとか、今ハーバードとかそういうところに行く子も少なくなっている中でですね、大学院にチャレンジしている子たちもたくさんいます。そういう意味で地元ということを大事にするっていう、先ほど論語の話がありましたけれども、まず根っこがないと駄目だと思うのですね。ですから、私は今静岡に住んでいませんが、やはり静岡の魅力とか静岡で生まれたということはどういうことで、育っているとはどういうことなのかっていう、この地元の地元力というか、地元を本当に教えてあげて、その上でいつかまた帰ってきてくれればいいわけですから、子供に旅をさせるそういうような教育というのが、ある意味で真の国際人を育てていくのではないかなということを今感じています。どうぞよろしくお願いいたします。

矢 野 委 員 長：　ありがとうございました。それでは、加藤百合子さんお願いいたします。

加藤（百）委員：　二人目の加藤です。菊川市で農業シンクタンクと称しまして、会社の経営をやっております。農業シンクタンクといいましても何をやって

いるのかわからないと思いますけれども、二つありまして、流通改革ですね。農家さんのいいものがあっても、なかなかうまく売れませんということがあって、農協が一部役割を果たしていないということがあるのですけれども、そこをうまくやっていこうという事業と、もう一つ、あの、本当にコンサルタントとしていろんな事業者さん、民間企業が多いんですけれど、県内企業さんが農業参入したい、そんなことだったり、行政さんが農業振興したいというときのサポートをさせていただいております。その中で一番動いているのはですね、今はやりのシェアエコノミーみたいな感じなんですけど、農家さん一人一人だと力がないものですから、上手く物流が組めない、売りたくても物流が組めなくて売れませんという状況なので、そこをみんなで共同システムを作って、そういう仕組みを作りましょうということで、企業さん、名だたる企業さんに御参画いただいて、今システムを構築しつつある。そんないろんな農業に関わる、農業が元気になるような地域事業をしている会社をやっております。ただ、私自身はですね、元々は産業機械の研究開発しておりまして、今、農業等ということで、農業ロボットの研究開発も始めております。そういう意味で、静岡はとても能力、力があるというか、スズキさんもヤマハさんもあって、何か創ろうと思うとですね、そういう方たちとタッグを組みながら、今、農業ロボットの開発を進めつつあるというところです。

教育に関してはですね、それほど本当に経験がなくて、アルバイトで家庭教師をしていましたとか、塾講師していましたとか、あと今二人子供がおりまして、中２と小２の子育てをしながら、学校教育ってこんなだったなという感じを、問題意識を持って、この場に参加させていただいております。今回、高校生が対象ということなんですけれども、私が常日頃、高校生になる前の子育てをしていて思うのが、遊べないなと。

私自身の話をしますと、小学校時代目一杯遊んで、中学校になったら勉強に目覚めて勉強して、高校は慶應女子高校という、ちょっとインターナショナルな雰囲気のある学校でしたので、それで自分に少し自信がついて、大学ではほとんど勉強せずに海外旅行をして、そのあと、イギリスとアメリカに留学したんですけれども、留学するころには海外での経験がいくつかあって、全部自分でお膳立てして行きましたけれども、そういう、こう、何て言うんですかね、ステップアップというか、チャレンジすることを良しとする環境の中で、ラッキーなことにいろんな経験を積ませてもらいました。さっきお隣の加藤さんもおっしゃったように、やっていいですかと聞くことが多いと言うんですけれども、大人の社会もそうで、失敗するかもしれないと全部チャンスをつぶされます。よく出る杭は打たれるという話があるんですけれども、それを見ている子供たちは出たら打たれるなというのは感じていると思うんですね。なので出ない方がいいよねと。自分が好きじゃ

ない子供たちの比率も日本は高いというので、そういった統計データも、やっぱり出ないで周りを見ながら粛々と今を、時間刻んでいた方がいいのかなと思っている子が、ちょっと増えちゃっているのかなと。それだけじゃなくて社会の環境があると思うんですけれど。そういう意味で国際化を進めて、海外へ先生を出すというのも一つ大事だと思うんですけれども、そもそものところでしっかり、幼児期に遊ぶ、そして勉強すべき年が来たら勉強を座学をしてという、ステップを踏む上での高校で何をすべきかという位置付けで考えていったらいいのかなというように私自身は考えています。

もう一つですね、私、産業機械を作って数学とか得意だったんですけれども、今度は農業経営になったときに、数学で、まあ数字は好きなものですから、経営というのが数字、経理とかそういう面でスタートするときにハードルがなかったんですね。そういう意味では高校で文系と理系を分けてしまう、あれはちょっと違うかなというふうに思っています。数学って問題を解くことが学問ではなくて、考え方を勉強することが学問ですので、受験があるから数学ってなんか20分以内に問題を１個解きましょうみたいになっちゃいますけど、そうではなくて、数学という学問の考え方、思考の方法自体を考えると、解くのが苦手だろうが、考え方を皆さん勉強できると思うので、そこは共通のベースとして、高校に取り入れていって欲しいなと思っています。ちょっと散逸的になってしまいましたけれども、答えにはならないですけれども、私の教育に対する考え方を述べさせていただきました。よろしくお願いいたします。

矢 野 委 員 長： ありがとうございました。それでは清宮さんお願いします。

清　宮　委　員： こんにちは。ヤマハ発動機ラグビー部の監督をしています清宮です。今、私がやることは三つありまして、一つは自分の契約先であるヤマハのラグビー部を日本一にすることです。昨年度、おかげさまで、川勝知事の熱い応援もありまして日本一を達成いたしました。もう一つはワールドカップの静岡開催を成功させることですね。ここに微力ながら尽力していきたいと思います。もう一つは部活動の地域化。これをやるのが、私が東京から磐田に来た理由の一つなんです。昨年度、この委員会でずいぶんこの話を提案させていただきましたけれども、残念ながら検討する議題というように挙がっておりまして、このままだと検討も今年はないなと感じているので、もし、私が昨年度から提案しているものが各論で議論されないのであれば、私はここに来る意味がないなというふうに思ってます。

５年ばかり私は東京におりまして、スポーツＮＰＯの代表を東京でしておりまして、名前はワセダクラブといいます。現在、子供2,000人くらいで、平日、週末、大学のスポーツ施設を使って約2,000人の子供た

ちがいろんなスポーツをしている。20種類ぐらいのスポーツがあるんですけれども、それぞれの部のＯＢがコーチとなって子供たちを指導している。それでスポーツを楽しんで、もちろん、トップアスリートの育成なんかも狙ってやっている活動をしています。それとそんなに離れていないんです。遠くないものを磐田市でやりたい。様々な部活動に関する問題提起がされているので、地域化というものが、必ず解決するキーワードの一つになるだろう。日本でどこもやってないので、まず静岡からやりましょうと。これを成功させるために、私は今ここに来ていますので、もし、この先この話が進まないのであれば、次から欠席させていただこうかなと思っています。よろしくお願いします。

矢 野 委 員 長：　ありがとうございました。それでは次に鈴木委員お願いします。

鈴　木　委　員：　こんにちは。大学生の鈴木竜真と申します。所属はふじのくに学生研究会というサークルに入っておりまして、自分自身静岡県立大学経営情報学部３年です。ふじのくに学生研究会についてちょっと説明させていただきます。今、県政の事業レビューに深く関わらさせていただきまして、事前学習や結果の総括、新たな提案を行うといった活動をさせていただいております。また、そこから新たな活動ができないかということを模索して、今必死に考えて運営をしています。また、私は大学では、地域のまちづくりや地域産業について研究をするゼミに所属し、様々なことを学び、吸収しています。ここにいる皆様のように、深い人生経験があるわけでは、到底ないのですが、今の教育を受けている身として意見を述べさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

　では、高校生の国際化について話をさせていただきたいと思います。私の出身高校では海外に姉妹高校があり、ホストファミリーとなり姉妹校の生徒を受け入れたり、姉妹校側の生徒の家にお世話になったり、それぞれの学校で多くの生徒と交流をするということがありました。その結果、積極的に参加した生徒は貴重な体験をしたと思います。しかし、姉妹校から来た生徒やホームステイをした生徒の数はとても少ないものです。そこで、もっと多くの学生が密に海外の学生などと交流ができるようなことができたらいいなと思いました。ここに至った理由なんですけれども、僕自身、高校のときにはホームステイのプログラムに参加することはなかったんです。でも中学校の頃にアメリカの方にホームステイをする市のプロジェクトがありまして、それに参加させてもらったときに、本当に英語もあまりできずに、ただ海外の家に一人で住まわせてもらうことがあって、ものすごい、本当に海外のありのままの実態を経験することができて、それは今でもとても印象に残っていて、自分の人生の中で大きな財産となっています。やっぱりそれを経験してしまうと、高校生の頃に行ったホームステイの経

験と比べると、学校自体で来てくださった生徒たちと交流する機会はあったのですけれども、全然やっぱり違ったんですね。本当に蚊帳の外の状態で、形だけ交流した形になってしまっていました。なので、そこで誰でも海外の人と接する機会が得ることができる方法がないかと考えました。一つ考えついたのが、学校の施設を使えば、無料でできるインターネットを使って、ライブチャットなど一対一の交流を行うことができるのではないかということを考えました。グローバル化が進んだ原因の一つとしてインターネットがあり、それを今の時代に合わせて効果的に使っていくことが大切だと僕は考えています。

次に、教職員の国際化について話していきたいと思います。実態が、ちょっと学生という部分でわからないんですけれども、やっぱり今よりもっと海外研修を増やした方がいいと思います。先生がやることがとても多くなり大変だとは思いますが、海外を見てきた先生は生徒により多くのものを教えることができ、様々な道を示すことができると思います。また、海外へ行った先で何をすることということも重要だと考えています。ただ、この先海外に行ったところで、教えてもらうだけではなく、自分たちと教育との意見交換を積極的に行うことで、海外の良いところを取り入れるだけでなく、自分たちの良い、教育の良い点、日本でも良い点はあると思います。しかし悪い点もその中で再認識することができると考えています。本当に、下にある原稿を読む形になって本当に申し訳ありませんが、これで発表を終わらせていただきたいと思います。

矢野委員長：　どうもありがとうございました。それでは仲道さんお願いいたします。

仲道委員：　ピアニストをしております仲道郁代と申します。今日のテーマ「国際化」という観点から自己紹介をさせていただきたいと思うのですが、私は小学校までは日本で、中学時代はアメリカで、その後日本に戻りまして、大学時代はドイツで勉強いたしました。現在は仕事上、海外のアーティストとの交流が国内外でございます。最初のアメリカは偶然でございまして、父の仕事の関係で一家で移住しました。その時に日本の学校の先生方からは、日本の勉強が遅れるから父親が単身赴任で行けばいいと、子供は日本に置いておくべきだという御意見をいただきました。今日なされる議論と隔世の感を抱いております。アメリカでは現地校に通ったのですけれども、その当時、そこにおりました日本人は私一人だけで、転校したその日には、学校中の生徒が私を見にくるという、そんな時代でございました。

その時代からの海外経験の中で一番思い出すのが、結局は国際化というのは人と人とのつながりであるということです。人と人とのつながりというものが、決して、流暢に言葉を話せるからできるものではなくて、文化の上において、できるものであると私は思います。と言い

ますのも、自分という人間を知らないと、他の人も他のカルチャーのことも、知ることができません。なぜなら自分という人間を知って初めて共感したり違いを認め合ったりすることができるからです。文化というものが、もし生活の中からできるものであるとしたら、もう一つ、文化を昇華させた芸術というものに触れていないと、結局は人と人とのつながりができない。私が芸術に携わっているからそう言っているのではなくて、芸術の中には先人の知恵に対してどう考えるのかというような作業が密度濃く含まれているのです。特に海外の方たちとの人間関係において、本当の意味での信頼を築くということを考えると、社会的に影響力のある方たち、影響を及ぼす立場にいる方たちこそ、文化芸術についての理解があるとか、意見交換ができるということは、必要だと思います。それがないと本当の意味での尊敬と信頼を得られないと思っております。今では世の中インターネットもありますし、スカイプやメールで海外の人とやりとりしたり、情報を得たりすることも様々にできるわけですね。ですから簡単な形ではなくて、人と人とが表面的ではなくて深く交流ができる機会、それは海外に行かなくても国内でも、もっともっと見つけることができる。日本にいる外国人との交流も大切だと思います。それも何かお互いに共感できるような、そしてお互いに語り合うことができるような、理解を深めることができるような、非常に知的な作業を持って、そういう知見で深い交流をすることができたら、本当の意味での国際化というものが果たせるように思います。

そういった意味で、文化芸術というものは大変有効なツールであると私は思います。芸術文化というものによって、そうした深い交流の仕組みを作ることこそが、行政ができる一番の役割なのではないかと思います。日常の生活レベルで、県にいらっしゃる大勢の方、高校生、教職員はもちろんですけれども、その親御さんたち、御家族の人たち、もっと多くの方に影響を及ぼすようなきめ細やかな施策の議論が、これから進んでいくのであれば、うれしく思います。以上です。

矢野委員長：　ありがとうございました。それではこちらに戻って藤田さんお願いします。

藤田委員：　失礼いたします。静岡市内で創業40年の料理屋、日本料理屋24店舗と、それから中国で２店舗、それから昨日帰ってきたんですけれどもハワイで和菓子屋さんを経営しております、なすびの藤田と申します。ハワイから帰ってきてゴルフをやって焼けているわけではございませんので御容赦いただければと思います。

さてですね、私は会社の経営者ということで、なすびという会社、和食店を経営しているということともう一つ、静岡青年会議所、ＪＣという団体の理事長を一昨年務めさせていただきまして、今年は静岡県

の会長ということで、1,100名を超えるＪＣのメンバーの静岡県の代表をやらさせていただいております。娘が二人降りまして、そんな３足の草鞋ということで私なりの御意見をさせていただければというふうに思います。まず、国際化というお話でございますけれども、静岡県が、なぜ今国際化を考えているかという、そもそもなぜなのかなと私なりに考えましたところ、地域間競争が激しさを増している中、また、アジアの諸外国が急激なスピードで経済が発展している中、日本として勝っていくことはもちろんそうなんですけれども、静岡県としてこれから勝ち抜いていかなければならないと私は思っております。また、その日本人としてということと同時に、静岡人としてどういうふうに勝ち抜いていくのかということが、私は大事だと思っております。例えば、その中でですね、国際化の中で教育についてはですね、静岡県の10年後の静岡経済を決める大事な、教育というものは大事なキーワードになっていくというふうに思います。その中で、いかに子供たちに教育を通じて新たな機会であったり、新しいチャンスを与えてあげるのかということが教育について大事だというふうに思います。そういった中で二つ大事なことがあると私は思っております。

一つ目は国際社会で生き抜くための学びの充実と人間形成であると思います。私もそうですけれども海外に行ってですね、まあ中国に行って、また中国人を招き入れたりして、たまたま尖閣諸島の話とかになるとですね、全く私たちは太刀打ちできないくらい、まあ合っているか間違っているかわかりませんけれども、中国人というのは自分たちの意見というものと歴史というものをしっかりと理解をしていて、こう、私はこう思うんだということを言える。一方で日本で、この中にいる方たちもそうでしょうが、歴史について自信を持ってこうなんだと言える人がどこまでいるのかと考えたときに、やっぱりその日本の日本史といわれていますけれども国史ですね、日本の国史というものをしっかり学ぶことが、国際社会の中で生きるためには本当に大事なんじゃないかなと思います。

それから日本人の精神性、互いが互いを思いやって、私心を廃して公のために動ける人間というものを、小さいときからもう一度教えていく道徳、徳育というものも、日本人として国際社会で生き抜いていくためには本当に大事な部分であると私は思っております。もちろん、海外に行くということで、高校生において海外にパスポートを持って諸外国を訪れるということなんですけれども、行って、その地方を見て、先ほどどなたかもおっしゃられていたと思うんですけれども、バスの中から観光して、この街がこうなんだなというふうに見るだけじゃなくて、やっぱり今、人口流出が激しくて働き手が少なくなってきている中で、私はもう、高校時代から働くというキーワードを持って海外を見る必要があると思います。何も、ただ観光とか興味本位で行くのではなく、自分たちが高校を卒業したらいずれ働かなければなら

ない、もちろん大学に行く人もいるでしょうし院に行く人もいると思いますけれども、やっぱり静岡の経済を支えていくためには高校生であっても働くと、何のために働くのか、どういう目的を持って働くのかということをしっかり考えた上で、海外の企業であったりを見ていく必要があると思います。

それで一つ提言をするのであれば、静岡から出ている、静岡から海外に進出している企業を、高校生が、例えばアメリカであったり中国であったり見ることで、静岡にこんな優れた企業があるんだと、自分たちの故郷にもすごい人たちがいるんだなということを感じて、仮に大学卒業後、海外に行ってもやっぱり戻ってきたりとか、東京でいい大学を出ていろんな人たちと知り合った中で、東京にいてそのまま世界に行くというのも一つかもしれませんけれども、やっぱり、確か高校生のときにこんないい企業があったからそこに戻って静岡辺りでやってみたいなと、そんな環境をできるだけ早く作ってですね、この地域が盛り上がるための布石を打っていく必要が、教育の中に必要なのではないかなと思っております。またですね、高校、今、教育の中ですと、なかなか順位を付けないというところがあると思うのですが、みんな一斉の中でやるのではなく、高校生の中でもある程度リーダーシップをしっかり持って、創業者意識を持てるような子供たちを育てるためには、やっぱり順位というものが必要だと思います。２番や３番じゃダメなのかではなく、やっぱり１番を目指すところには、素晴らしい努力であったり苦労があって、そこで強い子供たちというものが、私は生まれてくるというふうに思っております。そんなことをですね、やっていくことで、今、そういうことに着手していけば間違いなく10年後に子供たちが大人になったときに、この静岡の経済を盛り上げていける、そのための教育であってほしいなと、私は思っております。海外を見ればですね、日本の静岡の良さを知ったり、先進国であるアメリカに行って、トイレの機械一つとっても全く違う、何年たっても日本の技術に追いつけないというものを見てですね、子供たちが静岡、やっぱり日本はすごいなと思って、是非とも帰ってきていただく環境を、裕福な家庭だけではなく一般の高校生にまでいかに広げられるかということが課題でもあり、それがまた静岡の将来をつくっていくんじゃないかと私は思っている次第でございます。以上でございます。ありがとうございます。

矢 野 委 員 長： ありがとうございました。それでは続いて堀田さんお願いします。

堀　田　委　員： みなさん、こんにちは。私は、今回始めてこの会に参加させていただきました。学校法人沼津学園飛龍高校で校長をしております、堀田と申します。昭和57年に学校法人に勤めまして、今年で33年になります。その前は小学校に勤めて、縁があって、この学校に勤めております。

平成11年に三島スクールを立ち上げて、そこで、８年ほど仕事をし、平成20年に今の飛龍高校に転勤してまいりまして、２年間副校長をして、校長になって６年目です。静岡県私学協会には全日制の高等学校が43校ございまして、東中西にそれぞれ副会長がおりますが、平成26年度から東部の副会長を務めさせていただいております。

副会長になりますと、公益社団法人静岡県私学教育振興会の常務理事を兼務し、なおかつ、日本私立中学高等学校連合会の評議員にもなるので、現場の校長をしておりますが、日本私学のことも知らなければならないのです。本来であれば、校長ですので、本校のことだけ一生懸命やればいいのですが、なかなかそうもいかなくて、私学協会の関係で、今、こちらのメンバーに加えさせていただいたと思う次第です。

先ほど、池上副委員長から修学旅行で海外に出掛ける時は、スタディツアーという形が取れると非常に素晴らしいというお話を伺いました。確かにその通りだと思います。ただ、高等学校はわずか三年間という、人生の中で非常に短いこの三年間をどういう形で、子供たちの将来の夢ですとか、希望ですとか、そういったものをかなえる指針、選択肢を多く増やしてあげるというのが、学校教育の一番大切な部分でございますし、企業とは少し違った中で、教育現場では子供たちの夢をかなえようと取り組んでおります。

川勝知事がおっしゃるように、高校時代に海外へ修学旅行や研修という形で生徒を送り出すのは、私は大賛成です。スクール長という形で高校生の学校の責任者をしていた時も、海外に行かせないといけないということで、近くの韓国が一番良いと考えて、韓国への修学旅行をずっと行ってきました。それを五年ぐらいやった中で、できることならばアメリカに行こうと、ロサンゼルスへ修学旅行に連れて行きました。だいぶ飛行機に乗る時間があり、少し、体調を崩した者もおりましたが、それでもやはり、アメリカの海岸線を歩いたりして、帰ってきた子供たちは、色々な部分で非常に満足感があって、一歩でも二歩でも成長したという印象を持ちました。今、高校の校長ですが、校長になった時に、私は沖縄の修学旅行をやめて、海外の近いところに行くことができればと思い、韓国の場合は夜の11時ぐらいまで交通渋滞が続き、目の前に見えているほんのわずか200メートル先のホテルでも30分、40分かかるので、台湾に行きましょうということで、台湾の修学旅行にしてみたのですが、色々なコースがある中で、大変満足して、良い経験ができました。ただ、二年目に尖閣の問題があって、台湾の修学旅行に380人ぐらい行くのですが、うち、35名の父兄の方が、身の安全が保障されないならば、子供を修学旅行に参加させる訳にはいかないとキャンセルしました。修学旅行は100パーセント安全という訳にはいきません。普段は添乗しない私も行ったのですが、最終的には35名の方がキャンセルされました。仕方がないことですが、何ための修学旅行かということで、沖縄の方に変更しました。今年も沖縄県に行

くことになっていて、昨日、静岡空港から沖縄に向かい、台風の影響を心配しておりましたが、10分遅れで沖縄の那覇に着きまして、台風の上を飛んだ時には少し揺れたけれども、那覇に到着できたと報告を受けました。沖縄ですと一人もキャンセルいたしません。

少子化の中で子供はかわいい、子供を過保護にという傾向が非常に父兄に強いので、学校という現場で、職員もできるだけ海外の修学旅行に行きたいという思いはありますが、保護者の方はなかなか難しいです。沖縄ですと10万前後ぐらいの積み立てが必要ですが、海外はパスポートを取るなどの関係で、台湾で11万から12万ぐらいになります。そこのところが非常に難しいと思います。

厚生労働省の日本の貧困率の調査では、2012年の日本の子供の貧困率は16.3パーセントで、ＯＥＣＤに加盟している34カ国の中では10位です。外国に比べれば日本は非常に豊かだとおっしゃった委員の先生もいらっしゃいましたが、それは外国との比較であって、日本の中での比較で考えてみると、まだ、貧しい方たちもいらっしゃいます。おかげさまで静岡県は、就学支援金と授業料減免という制度があるので、私学に通っている生徒は、静岡県で１万８千円の費用を負担していただいているので、私立の学校でも授業料０円という非常に良い形になっております。ただ、生活していくという部分では、非常に難しい部分もありますので、全員修学旅行に行かせたいということで随分前から保護者会に協力していただいて、就学支援金制度を設けて、文化祭のバザーの収益金を修学旅行に行く前にお貸ししています。この制度を使いますと、全員行けます。ですので、知事がおっしゃっているように、海外修学旅行に高校生全員を行かせるためには、乗り越えなければならないハードルがあり、そのハードルを越える方法については、皆さんに知恵を出していただく中で、それがかなえば素晴らしいと考えております。

矢 野 委 員 長： ありがとうございました。それではマリ・クリスティーヌさんお願いします。

ﾏﾘ･ｸﾘｽﾃｨｰﾇ委員： 私は日本で生まれまして、父がイタリア系のアメリカ人で母が日本人で、私は４歳まで日本で生活し、ドイツ、アメリカ、イラン、タイで生活して、それから日本に戻って、上智大に入学しました。その後、仕事の関係で都市計画街づくりを比較の中でやるものですから、比較都市街づくりみたいな状況の中で、私自身も勉強不足だということがわかって、東京工業大学で社会工学という分野で高等修士を取りまして、比較都市街づくり、比較都市文化とか、比較文化とか、異文化コミュニケーターという肩書きで仕事をしています。

私は今回のテーマの国際化、特に、高校生の国際化についてというのは重要なテーマの一つだと思いますし、国際化という言葉自体は以前

から違和感がありまして、国際化というのは何なのだろうと、よく国の委員会の中でも国際的なイメージと、あと女性に多く入ってもらうために、国が動いている中で、委員を選ぶ時によく私を選んでくださっている理由の一つには女性でありながら国際的なイメージがあるから一石二鳥で選んでくださっているのかなと思うような部分もあるのですけれども、日本人が想像する国際化と本当の国際化は違うような気がします。

先ほど話もありましたけれども、自分の国の文化をよく知って、それを他の国の方々、他の文化圏の方々にきちんと自分の文化を伝えることができる方こそ、私は国際人だと思うのですね。色々な国際的な、世界中の知識や情報を持ちながら、それをミキサーにかけてかき混ぜればそれで国際化というのは、私は違うと思うのです。やはり、一番重要なのは、コミュニケーションがきちんとできていて、そこで意思の疎通があった時に、何でここで食い違うんだろうと思ったり、それを解決することが真の国際化ではないかと思いますし、外交にとっても、とても重要な分野でもあると思うし、私自身はイタリア系アメリカ人の父と、母が日本人ですから、いつも夫婦喧嘩のときに、私たち子供は文化の狭間に置かれながら生活していたのです。なぜかといいますと、母親が何を言っているのかはよくわかるんです、日本人の部分もあるわけですから、父親の言っていることもよくわかりますし、そこのところがすごく。母の価値観の中で私には大学に行く必要はない、女の子はとにかくかわいくて、静かで旦那様を支えるような女の人にならなければいけないから頭でっかちになるとよくないのよって、明治時代の親に育てられた母の価値観はそうだったんですね。父にしてみると女の子でも男性と平等であって、とにかく、一生懸命勉強して学もちゃんと付いてくれば、初のアメリカの女性大統領になれるかもしれないと言われて、実際にヒラリーのお父さんも彼女にそういうふうに言ってきたと思うのですけれども、そういう二つの文化の中で、日本に来ますと女性たちの立場や女性たちの社会の中での地位とかを見ると、なるほど母の言っていたことはこんなことだったのかなと、また、父たちの文化を見ていまして、女性は頑張って、男性と対等に仕事ができるのだとそういうところの文化もよくわかるようになりました。

じゃあ、そういうことを他の国に押し付けてもいいのかというと、そういう訳ではないと思うのですね。日本の女性たちには自分たちの地位の向上の仕方があり、アメリカの女性たちには自分たちの地位の向上の仕方が、文化的な比較からしますと、よくわかるような気がする訳です。教育もそうだと思うのですけれども、教育の中で非常に驚きましたのは、私自身は海外でずっと生活してきましたから当たり前に語学を覚えた訳です。別に努力して覚えた訳ではなく、気がついたら７カ国語が喋れたということなのですね。それは小さい時から父はイ

タリア系ですからおじいちゃん、おばあちゃんとイタリア語で喋らなければ通じない、そしてインターナショナルスクールに行けば英語を喋らないといけない、そこで語学を選択する時にフランス語を選ぶことにして、今度、イランとタイに行きましたら、そこに存在するインターナショナルスクールはその国の言葉を子供たちに教えていました。ドイツにいた時もドイツ語を学校で教わり、タイもそうでしたし、そういうことで環境が子供を作ると私は思うわけなのです。ですから静岡県の学校の中で子供たちは二ヶ国語ができるのは当たり前だというふうな解釈で学校教育が行われていれば英語ができる子供たちが育つと思いますし、なんとなく学んでいかなければならないものだということになりますと、どこで学ばせるかという時期もあると思うのです。

私は語学というものは、痛くないときに覚えた方がいいと思うのです。英語を覚えるのは嫌だとか、他の国の言葉を覚えるのは嫌だとか思うような教育の仕方や仕組みになっていると子供たちは拒絶反応を示すものではないかと思うのです。私はそうやって色々な国の言葉を話せるように育ったものですから、娘や息子も英語を教えてほしいと思ってアメリカの小学校に小さい時からアメリカの両親の所に行かせていたのです。

最初に小学校の二年生の時に娘を初めてアメリカのフロリダ州というとっても田舎なのですけれども行った時に学校からいいですよと言われまして、父が向こうで納税者ですから、孫も自分の保護管轄にある訳ですから学校に入れることができて、お願いしたら、英語ができないようならばちょっと困ります、なぜかというと、この子供が夏休みや春休みの一ヶ月間だけうちの学校に入るとなると、学校の先生からの集中を奪うことになるので、他の子供たちに公平にならないので、申し訳ないですけれども、一度、アクセプトしたものは断りますと。父も困ってしまって、それでは英語の先生をお願いして、家で英語を学ばせようと、夏休みの間はやろうと思っていましたら、学校からまた電話があったのです。私たちは大変田舎の学校ですので、外国語の子供たちが来る機会がないので、ぜひ日本からのお子さんが欲しいと。ただし学校の先生がその子に与える時間というのは、他の子供たちの時間を奪うことになるので、あなたのお子さんが一年間ちゃんと学校に来るのであれば、集中して教える義務がありますのでやりますけれども、一ヶ月だけでしたら生徒として来るのではなく、何か特技があればその特技を教えることで、来ていただきたいと。父からも連絡があって何か特技がないのかと言われて、バレエもできるピアノもできると言ったら、そういうのではなくて日本的な特技は何もないのかと言われまして、あなたは子供の頃に日本舞踊ができたから娘に教えていないのかと言われて、いや娘はバレエの方が好きだからバレエを教えていますといったら、あなたはもっと日本的なことを教えなければだめだと言われて、子供は折り紙はできないのかと言われて、折り紙

はできると言ったら、折り紙は特技だから折り紙だと言ってあげると言われて、学校の先生に折り紙は得意ですと言いましたら、折り紙の先生としてこれから来ていただきたいと言われて、折り紙の先生として一ヶ月学校に行きましたら、地元の新聞記者とテレビ局が来て日本から折り紙の先生が来たと日本の小さな折り紙の先生ということで新聞に載りまして、うちの母が、たまたまそこで、父がリタイアした後に日本料理屋を始めたものですから、日本料理屋に学校の子供たちを連れて、日本の文化を学んでほしいということで母がお弁当を作ってあげたのですね。そのお弁当には大きな梅干を一個入れて、これは日本の旗です、日本の子供たちは皆日の丸を見ながらお昼の給食を食べると自分の愛国心が芽生えると言ったら、それも地元の新聞に書かれて。

文化交流を向こうの方から積極的に引き込もうとしてやってくださったところが、娘にとってもとても良かったのが六年生まで、そして、また弟もアメリカに毎年行って、その時には必ず新聞社が折り紙の先生がまた今年も来たということと、折り紙の先生だけでは能がないので、子供たちの箸を持っていったりとか、箸の使い方とか、地元で航空会社がＪＡＰＡＮという大きなポスターをたくさん貼ったり、子供たちに富士山の絵を描かせて、それを廊下に貼って、折り紙の先生を毎年迎えるということを六年間やらせていただいた。そういう意味ではオープンな形で、多文化に対して受け入れようという気持ちを持ってくれたのが、娘にとっても自分が日本人としての誇りを持つこともできましたし、私は地元では特に静岡県は、ブラジルの方がたくさんいらっしゃって、そういう方々の文化をどこまで静岡県が本当に受け入れて差し上げて、彼らの持っている色々な素晴らしい文化をこっちからも引き出したり、または彼らが誇りが持てるような学校生活を送る子供たちを育てているのか、私は疑問に思うわけです。

なぜかと言いますと、私たちが前回言っていました委員会の中でもブラジルの子供たちを扱っている先生の話を聞きましても、彼らが入れない社会になっていることも私は残念だと思うわけです。もちろん、一生懸命やってらっしゃると思うのですけれども。そうやって、外国の方々をどれだけ子供たちが受け入れるかということは、私は修学旅行というのは素晴らしい話だと思いますし、ただ、向こう側でどこに連れて行くかが課題の一つだと思うのです。やはり、きちんと選択をして、向こうの国々を選ぶ、アメリカでも西海岸、東海岸の大きな都市ではなく、むしろ、本当にアメリカの片田舎に連れて行ったほうがアメリカの本当の文化というものを、アメリカは農業が非常に大きい訳ですから、農業の文化も見ていただきながら、とてものどかな環境の中で、みんなが接することができれば素晴らしいと思いますし、日本にいる芸能人の外国人の方々の話を聞いていても、自分の家の近くに日本人が住んでいて、そこの家に行くと日本の文化があって、それ

に興味を持って日本に来たくなっている外国人がたくさん日本にいる訳です。それと同じように、日本で生活しながら近くに素晴らしいブラジルの家族がいて、素晴らしい中国の家族がいて、韓国の家族がいて、その家族の子供たちといつも遊んでいたり、そこのお母さんにいつもおいしいものを食べさせてもらったりしていたから、その国に行きたくなったという日本の子供たちが非常に多く育っていけば素晴らしいと思いますので、静岡県はこれだけ世界中から働きに来られている方々がいらっしゃる訳ですから、そういう御家族の方々と、どれだけ多く地元の高校生たちが接することができるかによって、魅せられて、そこの国に行ってみたいという気持ちになってもらうような環境整備も同時に重要ではないかと思いますので、今回の委員会では大変期待しておりますので、よろしくお願いいたします。

矢 野 委 員 長： ありがとうございました。それでは六車さんお願いします。

六　車　委　員： 沼津市にあります高齢者の小規模デイサービス「すまいるほーむ」の管理者をしている六車と申します。最初に「すまいるほーむ」の簡単な説明をしますと、小さな民家を借りて、そこを改造して、デイサービスを行っているのですけれども、要支援１から要介護５の様々なお年寄りが毎日10名ほどお集まりになって、そこで共に一日を過ごして御自宅に帰られていくという形ですね。特に私たちは介護施設ですので、食事の介助とか、入浴の介助とか、そういう身体介護をしているのですけれども、特にうちで重要としているのは、いらっしゃる利用者さんに対して聞き書きをするということなんですね。利用者さんの人生についてどういうふうな生き方をされてきたのか、様々な経験について、お話を聞き、それを例えば冊子にしたりとか、何か形にして、お返しするという形にしています。私が介護施設で聞き書きというものを始めた理由といいますか、背景は、私はここの仕事に就く前は、民俗学を専攻して、研究者だったのですけれども、山形の東北芸術工科大学で八年間ほど教員をしておりまして、学生に民俗学を教える仕事をしておりました。その中で学生を連れて地域に入って、お年寄りのお話を聞くという経験がありましたので、そこの大学を辞めて沼津の実家に戻ってきてから介護の仕事を始めたのですけれども、その時に最初はお年寄りの話が聞けると思って入った訳ではないのですが、実際に働き始めてみると、介護が必要なお年寄りであっても、昔の記憶については大変確かでありますし、本当に豊かな言葉で表現でお話をしてくれていることがわかったのですね。それで、もともと民俗学をやっていたものですから、すごく食指を動かされまして、色々と聞き始めたというのがきっかけになっています。

介護現場で利用者さんの話を聞くというのは、実はそんなに新しいことではなくて、例えば、傾聴であるとか、回想法というような形で今

までも行われていたのですけれども、私がそれらに対して思っていたのは、介護現場というのは何かができなくなったお年寄りたちに、できる人がしてあげるという形で関わる、常にそういう形で関わるのですけれども、傾聴であるとか、回想法というのも結局同じでようなことであって、そのお年寄りが気持ちよくなるとか、認知症の症状が改善されるとか、目的を持ってお話を聞くことになりますので、どうしても上下関係というものは変わらないのですね。ところが、私が民俗学で培ってきた、聞き書きというのは、むしろ、知らないことを教えてもらうという立場でフィールドワークして、話を聞くということをしてきたので、そういった立場から介護現場でお話を聞くと、関係性が逆転するのですね。介護する時はしてあげるという立場に立つのですけれども、お話を聞く時にはお年寄りが主役になって、それを教えてくれる先生になる訳ですね。その関係性が逆転するというダイナミズムがいままで介護現場にはなくて、必要だったのではないかなと改めて感じております。

もう一つ、民俗学で大切なことは、聞き書きをする目的なのですけれども、一つは、記憶を継承するということなのですね。かつて行われてきたものがだんだんなくなって来てしまうのですけれども、それを記録に残しておくといったことで次の世代に継承していくということが、一つの目的なのですけれども、介護現場にも同じことが言えていて、色々なことができなくなってしまったお年寄りなのですけれども、生活経験としては非常に豊かなものをもっている訳ですね。それは人間としても素晴らしいものがあるし、地域を考える時にも色々な財産になると考えていて、そのお話を聞いて、それを若い世代の職員たちとか、いまうちの施設には地域の子供たちが遊びに来てくれて、おじいちゃん、おばあちゃんから色々な話を聞いたり、一緒に教えてもらったりしながら料理を作ったりしているのですけれども、そういう形でお年寄りから教えてもらう、記憶を継承するということが、実は介護現場においても大切なことだし、地域においてもいま失われているのですけれども、これから必要になってくると思っていて、この会議の中で、教育という、地域との関わりの中で教育ということを考えていく中でそういったことも盛り込んでいけたらなと考えております。

今日の一つのテーマである国際化ということなのですが、今の話とは直接は関係ないかもしれませんが、どこかでつながってくるとは思うのですが、国際化という言葉に対する違和感というよりは、何のために国際化をするのかとか、国際化をすることで一体何をしたいのか、あまりよくわからないことが多かったりするのですけれども、事前にいただいた資料の中で、総合教育会議の議事録の発表者の発言の中で、「子供たち、青年たちを企業のグローバル化の中で活用できる人材に育てていく」という発言があるのですが、言っていることはよくわかるのですが、そういうような立場で国際化を進めていくと、例えば、

海外の文化に対して労働力としてしか見なさなくなってしまうこともあるのではないか。むしろ、今まで皆さんのお話の中で出てきたような、人としてとか、文化交流としてとか、基本、芯のところではそういうところで進めていくのであれば、二つほど私は大切だと思っているのですが、一つは、文化相対主義的な立場をとるということと、もう一つは多文化共生ということだと思うのですね。

私も全然国際人ではないのですが、環境としては高校時代に留学を進めているような高校に属しておりましたので、高校時代に短期でアメリカにホームステイした経験もありますし、大学は静岡県立大学の国際関係学部という、まさに国際化の場所を選んでいった訳ですけれども、その当時は私としては非常にふわふわした気持ちで、インターナショナルな人間になりたいみたいな意味合いで、そういった所を選んでいたのですけれども、結局外に出ていった時に自分自身が強く意識せざるを得なかったのは、日本人としてのアイデンティティということなのですね。それはすごく強く意識させられました。

例えば、アメリカに短期留学した時に、私の高校時代はアメリカの高校生にジャップと呼ばれて石を投げられたこともあったりして、それで、私は日本人なんだ、ジャップなんだと思ったりして、あるいはちょっと体調を崩した時にものすごく食べたかったのはお粥であったりとか、そういうところで自分が国際人になりたいと思いつつも日本人であることを強く意識した訳ですね。大学で国際関係学部に入って、アジア文化コースで中国文化を勉強していたのですけれども、結果的に選んだのは、日本文化コースだったのですね。結局、日本人とは何かとか、日本文化とはいかなる文化なのかとか、強く意識する私にとっての国際関係性とはそういうことだったんです。それが、たぶん民俗学というのに結びついているのですけれども、ただ日本人とは何かとか、日本文化とは何かといったときに、それを絶対化するような視点にならなかったのは私にとっての救いだったのかなと思うのですけれども。卒論のテーマで、当時米の不作が続いて米を海外から輸入せざるを得ない時があったと思うのですけれども、その時に非常にマスコミを賑わせたのは、日本人は米文化だ、稲作文化だということなんですね。その時には私は素朴な疑問から、なんで日本にとってお米は大切なのだろうというところから卒論を米と日本人というテーマで書いたのですが、ところが民俗学的に色々と研究してみると、米を選ばなかった日本人もいるのだ、あるいは選ぶという背景には政治的な要素であるとか、宗教的な要素があったのだということがだんだんわかってきて、むしろ、自分の日本文化というものを相対化していく作業になった訳です。ですから、それは私の例なのですけれども、国際化というのは自分の文化を相対化していくプロセスにつながると思いますし、他の文化の価値観をそれぞれで意味があるのだと文化相対主義的に認めていくことになるのではないかと思います。

もう一つは、研究者時代に民俗学ということで日本文化だけを研究をしていればいい時代ではなかったので、苦手な英語を使いながらも何とか海外に行っていたのですけれども、私がやっていたのは、焼畑とか農業に関係する問題だったのですけれども、フィールドワークで行ったのが、雲南省とかラオスとかだったのですね。その時に目の当たりにしたのは少数民族の人たちが共生している、対立はあるけれども共生しているという状況とか、特に私が勉強したのは、人のあり方だけでなくて、焼畑の中で、ラオスの焼畑だったのですけれども、山を焼いてそこに植物を植えていくのですが、その中で粟とかひえとか蕎麦とかトウモロコシとか色々なものが、雑多に栽培されている状況があったんですね。それは、日本の私たちが普段見ている農業からすれば非効率的に見えたのですけれども、たくさんのものがそこにあるということ自体が豊かな食文化を生んでいるし、食生活を安全にしていく、一つのものが駄目であっても、他のものが食べられる、色々なものがそこにあるということが豊かさを生んでいるということを始めてそこで実感したのですね。それは植物の世界のことなのですけれども、人間の生き方にも通じるものがあると思いまして、多様な価値観や多様な生活習慣を持った人たちが、共に生きているということがある時点ではいさかいを生むかもしれないけれども、大きな目で見てみれば豊かさを生んでいくのだという見方を、例えば留学とか、修学旅行に行くとかという海外経験の中で、子供たちが感じ取れるように教育の中で指導していく、促していく必要があるのではないかなと思います。

それが国際化の社会の中で必要な価値観というだけではなくて、例えば地域社会を見たときにも認知症のお年寄りがいたりだとか、障害者がいたりだとか、一見すると助けを必要とする弱い人たちということになりますが、そういう人たちが共に生きているということが、地域社会を豊かにしていくのだという、そういった地域を見る中にもつながっていくのではないかなと思っています。

矢野委員長：　ありがとうございました。皆様にもっともっと時間を持っていただかなければならないと、つくづくお話を伺いながら感じているのですが、今日は初回ということで、多少予定の時間を超過すると思いますけれどもお許しいただきたいと思います。それでは藪田さんお願いいたします。

藪田委員：　日光水産の藪田と申します。昨年の検討委員会に続き、委員を引き受けさせていただきました。御前崎に本社があり、主に遠洋鰹の一本釣り漁業を営んでおります。御前崎では、江戸時代から一本釣り漁業が盛んに行われてまいりました。かつては駿河湾でも鰹がたくさん捕れた時代もありました。資源の減少や船の性能の向上によって、沿岸から近海、近海から遠洋と今では世界の海から鰹を捕っています。昔は

400隻ほどありましたが、現在では、全国で21隻になってしまった遠洋鰹一本釣り漁船ですが、近年では資源、環境に優しい持続可能な漁法ということで、世界的にも注目を集めております。

私は普段は会社の仕事とともに、全国の遠洋鰹一本釣り漁業会長を務めながら一本釣り鰹の普及に努めております。教育関係に関わらせていただくきっかけとしては、学生時代に教育学を専攻し、家業がなければ先生になりたかったということがあります。結果的に教員採用試験に落ちたので偉そうなことは言えませんが。また、主な活動としては、７年前に仕事の延長でお魚マイスター、このバッジがそうですけれども、という資格を取りまして、東京や地元の小学校中心に魚食普及の授業を行っています。また、四年前に地元の小学校のＰＴＡ会長を務めさせていただいたことをきっかけに通学合宿や海の安全教育などの活動のお手伝いをしております。

高校生の国際化ということですけれども、新入社員なんかを見ていると不足している能力は、コミュニケーション能力が非常に低下しているのではないかと思います。携帯電話やインターネット、国際的な情報をとるにもこれが全て悪いとは言いませんが、コミュニケーション能力を高める機会を失っているのではないかと思います。私どもの船は一隻に日本人、インドネシア人、フランス人と30人乗っております。一年のほとんどを家族よりも長い期間、共同生活を行うので、仕事ができる、できないというよりも、一定のコミュニケーション能力というものが必要になってきます。若くて漁師を辞めていく理由の一つに、集団生活に馴染めない、コミュニケーションが取れなくて孤立してしまう、ということがございます。国際社会では、言語が違う人たちに自分の意見や相手の意見やアイデアを引き出さないといけない、そういう能力を身に付けていく実践的な教育が必要であると思っています。

矢 野 委 員 長： どうもありがとうございました。それでは渡邉さんお願いいたします。

渡 邉 委 員： 時間がちょっとないようですが、簡単にアンカーを務めます。皆さんのお話を聞いて、私は大変勉強して、今日はいい席に出させていただいたと思いました。私は静岡県では東の端ですが、三島市にあります佐野美術館の現在館長を務めております。佐野美術館は昭和41年、静岡でも比較的早い時点で設立され、来年で50年になります。私はオープンのときから学芸員でおりまして、ですから来年で50年間美術館に勤めたことになります。現在ですね、全国博物館会議というのがありまして、4,000館くらいの日本の博物館の会の副会長を務めておりまして、全国の博物館、美術館との連携を持って仕事をしております。で、佐野美術館はいろんな東洋美術のコレクションがありますけれども、現在は静岡の県内に、いろいろな方に大勢に楽しんでいただけるように、いろいろと多方面の展覧会をいたしております。その中でもです

ね、全国的にもちょっと知られた、有名な日本刀のコレクションの話を申し上げたいと思います。

私が美術館に入りました頃は日本刀などは非常にマイナーなものでして、ほとんど人はそっぽを向いていたものです。なぜか私は日本の刀剣の中に非常に魅力を感じました。私も美術館に入るまで日本刀は全く知らなかったんですけれども、実際に優れた日本刀を手にしまして、これは日本人が生み出した比類ない工芸であるというふうに思いました。最初は女だてらに日本刀と言われましたけれども、女か男かは別にして、日本刀そのものの工芸は、もはや世界に誇るものだと実感したんですね。

それでですね、ちょっと世界、国際化というのは、まあ私はあんまり国際的には縁がない仕事をしておりますけれども、実はですね、皆さん御存知の新渡戸稲造、あの方は明治33年に武士道という本をアメリカで出しました。それはなぜ出したかというと、新渡戸稲造が、ある、ポーランドだと思いますが、ある学者から、ヨーロッパは子供たちをキリスト教で共同教育をする。日本人は何で教育をするんだと問われたときに、新渡戸稲造ははたと止まってしまった。それでいろいろ考えて数年後にこの本を出したんですが、それは自分の幼い頃、両親ないしは近所のおばさん、おじさんたち、そういう人から教育を受けて自分が現在あって、この世界の中で一応、皆と肩を並べて生きていかれる自分をつくってくれたのは何かといったら武士道だということに、はたと気が付いたんですね。そして、日本人を創り出したのは武士道だということで本を出した。それで明治の時代にですね、まだ世界でほとんど知られていない明治の人たちが、一挙に欧米の人たちに非常に尊敬の念をもって向けられた。それはなぜかというと、この武士道が明治の人々の根幹にあったということですね。武士道の中で何が一番大事かというと、新渡戸稲造の武士道によりますと礼なんですね。礼を以て人に対する。厳しく武士道では礼というものを教育されているから、常に自分に対しても礼を尽くす。人に対しても礼を尽くす。その礼を尽くしたことが世界での評価をされ、独特の日本人の風潮というんですかね、まあ徳を持った人間として尊敬の念を集めたと思うんです。

その礼の形というものが象徴的に表されたのが日本刀なんです。日本刀は武器じゃないかとよく言われますけれども、この前新聞記者の前で話したときに、日本刀を武器と思いますか、芸術と思いますかと聞いたら、３分２くらいが芸術でした。でも武器と思う人が３分の１ぐらいはいました。無論、武器として平安時代に発明したものですけれども、武器ではなくて、武士一人一人が自分の命を託してもいい、いざという時には自分の命を託して、自分の名を世の中に、後に残してくれる。そういう優れた日本刀を腰に１本差したいというのが平安時代の武士でした。ですから平安時代、今から900年くらい前ですけれど

も、もう本当に誠心誠意、財力もかけて美しい太刀を打ったんですね。
ちょっとこの秋にですね、その平安時代の名刀、国宝クラスの名刀を佐野美術館で展示しようと思っているんですけれども、それは余談ですけれども、なぜ、日本刀がそんな優れているのかを一言で言いますと鉄なんですね。鉄は世界中でたくさんあります。地球上にいっぱいある。その鉄の中で、鉄は一般的に放っておけば錆びてしまう。すぐ錆びる。真っ赤に錆びる。汚い。ヨーロッパで鉄は卑しい金属の扱いになります。でも日本人は、その鉄を鍛えて、美しい日本人の感性をよく表した曲線の形にして、それを研ぎ上げて、平安時代に研ぎ上げたものが900年後の今も錆びさせないように研ぎを、光りのままで保存し守ってきたという、その精神ですね。放っておけば錆びてしまう。それを絶えず磨きをかけてきたということ。それが新渡戸稲造に言わせると、それが礼を尽くす、物に礼を尽くし人に礼を尽くすということだと思いますね。それが基本的に教育に関連する。それによって自分が教育されるというふうに、短く言えば新渡戸稲造は考えて、発表した。それが今でも欧米では新渡戸稲造は日本人の、全ての日本人として、また武士道というものが優れた日本人を育成した精神として、今でも語られていることがあるようですけれども、日本人はあまり意識していないのが、現状では多いと思います。
しかしですね、このところネットで日本刀乱舞というのが、御存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、女の子たちが日本刀で勝負をするんですね。それでかっこいいお兄さんが出てきてゲームをするんですけれども、それが今100万近い会員を持って動いていて、今年の正月からですね日本刀ブームを巻き起こしてまして、もうどこの美術館に行っても日本刀の本はありません。うちでもみんな売れてしまいました。不思議な現象ですけれども、それは１つのゲームの中で生きているのですけれども、何か１つの魅力を感じているというか、現在何か足りないものがある、そんなものにちょっと気付いている。そんな予兆みたいなものを感じる次第です。それでですね、その中で日本人は、日本刀の中で、一番私が大事なのは、自然の素材をよく見て選んで、その自然の素材を良く磨きをかけて、そして自然の素材の持っている特質を鑑賞する能力があるということだと思いますね。それは世界の中で、多くの民族の中で日本人の感性は独特の感性ですね。その感性が今もって日本刀を磨いている。こう思うんですね。
最後にですね、徳川家康は知事がおっしゃるように260年、この日本の平和をもたらした。確かに世界では珍しく260年間、戦いのない時代をつくったという歴史人であり、静岡の誇る先人であると思うんですね。もう一つですね、それを考える上において、その江戸時代の260年は、平和の体制をつくったことは無論そうですけれども、そこに生きた日本人みんなが一つの課せられた自分の身分というか、その中において自分の分を守りながらも自分の文化を築いてきたということで、

江戸時代の日本人のエネルギーが、本当に260何年文化が結集されて、それが明治以降の日本をつくってきたんですね。ですから、江戸時代の260年の計は、日本人全部がつくりだした平和であったと私は思うんですね。平和を持続したというところにも家康と、家康の偉業とともに目を配って日本人の誇りに思っていただきたいと思います。以上です。

矢 野 委 員 長： ありがとうございました。本当に皆さんありがとうございました。大変貴重な御意見、体験に基づいた素晴らしい御意見だったと思います。最後に知事、何か一言ありますか。

川 勝 知 事： もう、お礼の言葉だけですが。片野さんから感謝の大切さを言っていただいて、最後は物にも人にも礼を尽くすべしという武士道のお話を渡邉さんの方からしていただきました。磨かずば玉も鏡もなにかせむ学びの道もかくてあるらし と昭憲皇太后がお歌いになられましたけれども、見方を変えれば鉄も鏡もということになりますですよね。ともあれ、お一人お一人のお話が先生ですねやはり。もちろん本当の先生もいらっしゃいますけれども、教員免許を持っていると、そういう意味ではなくて、やはりこうしてそれなりの方々が集まってくださいますと、まさに傾聴に値するということで、短い時間ではございましたけれども、それぞれ短い時間で語るべきエッセンスを今日は賜りまして、これはどう形にするかと。

前の検討委員会は「検討」委員会ですから。これは実践委員会です。しかも前の委員会は教育委員会の附属機関だったようですね。教育委員会に属していると位置付けられたみたいです。私は政治学的なところにちょっと無頓着なところがございましたけれども、本実践委員会は知事部局に直接属しております。教育委員会と、それからこういう知事部局と言いますか、社会全体というのは、教育委員会はある意味で小さく、こちらの方が大きいことになりまして、それぞれの分業すべき所がございますので、例えば一つの例ですけれども、スポーツの地域化ですか、こんなのやるに決まってますよ。だからここの提言はですね言いっ放しではありません。できない理由を挙げるのは簡単です。その辺は官僚は得意なんですけれども、それをいかに実現するかという方法を考えるという意味での実践委員会でございますので、実践できるところはもちろん、あの手続もございますし、順序もございましょうけれども、基本的に御提言いただいたことは実践するという委員会でございますので、是非皆様方、おっしゃったことに対して言いっ放しになっていると思わないでくださいませ。きちっとしかるべき者が聞いておりますので、実践をしてまいりますということを約束申し上げまして御礼の言葉に代えさせていただきます。以上です。ありがとうございました。

矢 野 委 員 長：　ありがとうございました。次回は７月の予定でございますが、そこでは人材バンクについて取り上げたいと思います。これは、教育の地域化を進める一つの手段になると考えておりまして、去年の検討委員会の提言をいかに実践するかという観点で意見交換したいと思いますので、御協力をよろしくお願いいたします。ここで、事務局から御連絡があるとのことです。

事　　務　　局：　矢野委員長ありがとうございました。委員の皆様、長時間にわたり、誠にありがとうございました。今、委員長から御報告させていただきましたとおり、第２回実践委員会は７月の開催を予定しております。また日程調整をさせていただきまして、皆様に御連絡いたします。それでは以上をもちまして、第１回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。皆様、ありがとうございました。

【閉　　会】